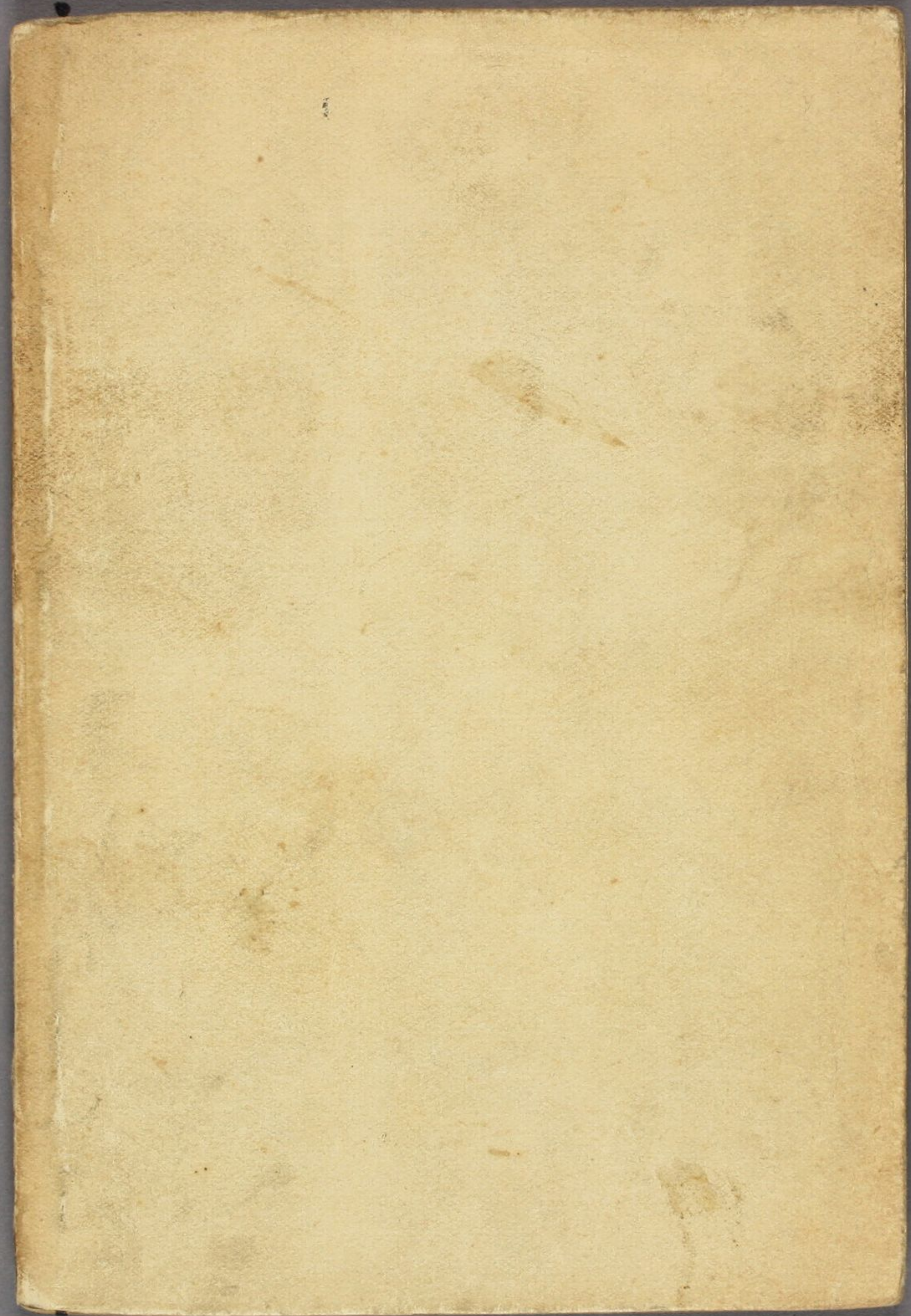


蘭集







8
7
5

序

青蘭集成りぬ。

名もなき青年詩人の作を蒐めて、人に見よとに
はあらず、かゝる小草も緑の衣して、涼風に花の
冠のおのづから首だるゝことなり。

夏山行けば、瀧しぶき谿にこもりて葉といふ葉
のしめり、仄暗きに人の顔とも見まがはれて咲く
山百合や白く、満山の風も花の一辨に起れど、ほ
こらしの風車草、青蘭も亦花なり、草なり、自然
の光の洩れぬげに洩れて、千すぢの葉の細やかに、
ささやかなれど花も咲いたり。

青蘭の一葉ゆきも、影はおのづと草に隠れて
なく、朝下めり、青は立てど、山彦に泌まん氣は

ひもなし、埋れしもの隠れたるもの、永久に榮な
しといふか、若きものは力なり、隠れたるものは
力あり、この草莖にひそみはすれど、やがては起
る詩歌の新聲、天風を捲いて、それ發せざるを保
し得んや。

若き心に若き歡の情あふれて、爰に青蘭集の門
途を送る、心ある人こよ、君も來つて木陰にはこ
りなきこの一葉を摘め。

東京早稻田にて

八月上旬

破生

はしがき

青蘭集は詩壇に貢献し、詩壇の隆盛を圖
るてふ、四角張つた、こむつかしい趣旨で
いだしたのではない。

青蘭集あつむる所、多くば曾て『白虹』に掲
げしもの、而も青春燃ゆるが如き、新進作
家の詩、いかに幽遠にして、いかにうるは
しいであらうか。

三伏の炎天、蟬聲かしましき時、綠蔭竹
榻の下、これを繕いて清涼劑となるであら
うか。

八月上旬

編者識

青蘭集目次

胸なる花
伯耆者雲
海べの林の歌
海鳥
夕の歌
向日葵
四聯狂葵
献燈狂葵
水ごゝろ
清怨
吉備姿

人見東明
原田讓二
石井楚江
有本芳水
秋元蘆風
内海泡沫
斂白明
菫月一露
筒井菫坡
井上桐雲
三木露風

晚鐘
草いちご
野調
歌卷を秘めて
丘上微吟
大火
木枯
君が家
斑鳩寺
うれひ
磯少女祭

川路柳虹
門田臥風
畑荷香
吉備男
野村董雨
渡邊春浦
北澤芳雨
萩原美棹
有松曉衣
栗岩花山
入澤涼月
中村星湖

田園にかくれ居て
琴坂、三味坂
羅馬の友に
秋興
こゝろ草
花のゆらぎ

うたかた
ほふす
内田萩江
河田白露
平井晩村

青蘭集

胸なる花

入澤涼月著

人見東明

靈妙ひかり流れ入りてし
しら鳩の可憐瞳の
靈化せし、星よ、音なく
いろ沈透天なる和田へ
常榮のきはいに生れし
その夕べ、闇に含むる

不知火の灰かなること
わが胸に花育くみぬ。

鬱幽としげる木下に

落ち敷ける枯葉朽葉の

挾介より夢みるこごく

あこがれて白きいのちに

生れし、吾か、胸なる花は

逃げ水の映りきゆごと

折りく、の木葉透く光り

ほのに見てはのめき生いむ。

真ひるまは戸なす繁枝に

さねぎられ、死の相うかぶ

病人に寂びしく似たる

木暗路の、薫りも見せぬ

花なれど、沈める日影

斜にゐればたぎつ血汐に

ふれしごとときめくこゝち

あたら世の靈添ふと見る。

ほのぼのと下枝透きもる

夕陽の芬りになづみ

あねかなる夢にまかれて

あるがごといのちも淡き
 わが花をくろう被へる
 老木の木もたほれて
 朽ちゆけば光りは闇の
 精を食みぬ匂ひもさやに。

日の香る光りの海に
 浮き出でし花うつゝなく
 あたゝかき血汐たぎれる
 育くみに白き命も
 くれなるの濃き根をもちぬ。
 おほいなる天空に生ひんと

勢ひかの希求もひろごり
 八荒を胸にあつめぬ。

かゝる夕高榮めぐる
 火を消してまぢをついばむ
 魔嵐は亡びあひせぬ
 そよ今し、凶のたくらみ
 くろき沼の寂びしき香に
 酔はしめて死の羽にはこび
 永劫のいぶき葬りて
 わが魂の領うすれゆく。

吾を離る沈めるいのち
 亡ぼしの死の手に移る
 この刹那いみぢ芬りの
 温風は光りを映して
 やはらかに胸なる花を
 なでてゆく、青芽ふくごと
 勢ひばみ不斷の糧を
 はぐくみてあねかに咲く。

しいなねし胸なる花は
 新らしき生命をもちぬ
 深妙のかをりもしるく

うつくしき二人の胸を
 香にたきてその香にいでし
 とこひさの聖燭、かがやき
 香と光り永劫に匂はむ。

伯 耆 雲

原 田 讓 二

北海の雪の渦卷
 大山に反響をかへし
 根力は荒びて濤へ
 かゝる夜も青き夕月
 谷間に光の震へば

駄馬の影凍りて往かず。

今日夕日赤松染めて

翅に散らす雪の粉々

山雀の一群呼ばふ

林間の坂路をあふぎ

雪晴の光に活くる

北吉備を夢みてのぼる

海に咲く花にはあらず

雪割草夕の旅に

かほうすも胸にめぐれど

笠紐に結びつゝ瞰れば

驛路は冬とも見ぬす

暮れ行くに花やぎわたる

晴白の靈を碎きて

如月よ何地に墮つる

棺衣を曳ける遠山

雪光り空にいざよひ

大木の枝にたらく

日を溶けて歌のかあしき

つぶ石のはてしも知らに

冬の骨まろぶが如き
 朽野よ息吹きかへせ
 ゆたかなる河波うるみ
 匂ひつゝ消ゆる泡の音
 行きくゝて平蕪に満たむ

緑錆び夕日ながるゝ
 千竿の篁づたい
 一時に騒ぐと見わた
 暮影は心にひびく
 戦ぎて急ぐも由なし
 伯耆雲雪を飛ばすに

白花か亂舞する姿

冷香の漲ふかく

落つる日の透影いたむ

あゝ幾日南は慕へ

愁のみ空につたへて

乾雲に春海も映らす

蘭の田の水

かつくこと

割いては鳴くか

鶺鴒よ

大雲小雪
野を吹いて
白き鳥影も
ひらめかす

二月の寒さ

齒に泌むに

ふくめど鳴らぬ

豆の葉の

あゝよしさらば

譜はのうで

・

葉はいたづらに

裂くるども

麥生のほとり

旅人の

疲れし胸を

汝は知らむ

海への林の歌

石井楚江

朝天、雲の翼吹く
風、濕りて砂に落ちぬ

白波あぐる朝冷の
 磯越わくれば盾の如
 林はゆるく並びけり
 前にし開く大洋の
 遠の島々めぐりよる
 潮の光の水烟り
 寥しき岸を染むればか
 五月の緑影深く
 波には波の色映して
 春花稀なる磯つづき
 南の國の夏を見る
 かの北夏の天澄みて

雲も冷凝る山國の
 荒鷺眠る深林や
 梢に星も光震ふ
 秀つ峰かけて吹き落つる
 天風海に沈むとき
 夕月海の靈をこめて
 淡影ささむ砂の上
 木の根を洗ふ清波の
 青霧翻へる水天や
 高きに韻へ其の姿
 疾風よ雲の尾を亂し
 千里に走る銀山や

海の柱のくづれつゝ
 燃わては凝る血の汐の
 紅光を噴くや熱の海
 不朽の緒琴音にこもる
 涯なき闇におのゝきて
 潮を被りて立たす時
 磯巖蔭に老者らば
 我世の春にあこがれて
 若やぎかへる胸騒ぎ
 眸を凝らす燈臺の
 燭も消ぬと惑ふらむ
 さあれ藝術の國に似て

しづかに明くる此の朝の
 林のさまのしめやかに
 自然の光膽かなる
 緑の樹々の彩よ
 今白き羽を閃かし
 梢はなるゝ海鳥の
 叫びは雲に消行けば
 磯菜青藻をふくうめて
 みちくる朝の潮の音
 夢やうつらむ冷やかに
 あゝ旅人は砂に埋る
 朽舟に歌へり朝の歌

林の蔭の海士が子は
 櫂の音高く反響へしつゝ
 晴れたる沖に漕ぎ出づれ
 やがて夕陽に泛びつゝ
 八潮路踏みてかへる時
 たとへば暮るゝ春の夕
 花野さびしみかへる子が
 母、戸によるをなつかしむ
 思畫のごと、故里の
 馴寄るとも見む濱の影
 あゝ陸にして海を戀ひ
 海にしあれば陸思ふ

人の情の美しき
 しるしに染むる薄緑
 我は流離 久に見ぬ
 石楠花咲ける故里の
 かの野の林慕はしみ
 海べの路をいりくれば
 千枝の繁みのはやかに
 緑に浸る短夜の
 夢の匂は露の色
 さらぬだに人酔はしむる
 潮の香雫く朝風に
 熱き涙も流れつゝ

潮にや裂けし黒松の
仆樹雙の手にまいて
今かあけたる大海の
遠音に獨聞入れば
魂もどろくる思あり
あゝ青海の

朝ぼらけ

きりの晴間に

はゝるめる

林の縁

目に映らば

人、

舩ふねを

叩きつゝ

陸なる夏や

戀ふるらむ。

海 鳥

有 本 芳 水

胸より吹きし和風の
われに照り來る白浪を
隠るゝごどくくづせしに
沙をふめばわが影の
海に齋かむ時ありと
心の糸は亂れたり

磯にちひさき草山は
 天なる息に青々と
 みごりの風の透く如
 俯居の海女の後姿を
 たゆかに吹さし冷たさに
 頬白の面は濕りけり
 只寂しうに磯の子は
 島に送りし戀人の
 やさしき姿うかべたれ
 胸に抱きし悲しみを

沙に刻りてあし日の
 其繪姿をいとほしむ

毒なき海の莫告藻は
 うれひの影を追ふ如く
 光もなくて流れより
 夢さへのせし落潮の
 悲しき響もたらしめて
 珠とる如く瞳にうつる

大海原と名はあれど
 東の國土、西の島

戦ふ如く見ゆし時
 天の浮橋悲しき日
 母に負はれてわたる如
 虹はわが頬を照らすらむ
 雨の袂へ海の火の
 透きたる色の赤くして
 潮たる胸は花やげご
 笠篔の細音を奪ふ如
 日のかげとほく浪を縫ひ
 われに寄せてはごよむかな
 白々しらむ浪の香は

海の木精を映し去り
 渚を走る旅人の
 つまづく影に透むごと
 つゞけば空に高く舞ふ
 海の小鳥に觸れにけり
 羽の紅花すがた
 天の瑞雲もゆるごと
 胸乳にうつる夕なぎの
 波の巴のうすくこく
 添へば雲切る一筋の
 朱冠の色燦めきや

島はかけらば天にして
 書かぬ夢をはぐまむ
 消ねあばふるふ夕影に
 空に火柱立つさまや
 海に沈まば蜃氣樓
 魂は流人を照らさずや
 あゝさかんなる胸の靈の
 さめぬ光になづさひて
 浮霧ふかくさまよへる
 島の寂しきたはむれの

瞳ひとみにうつる色をのみ
 姿をおもへ灰やかに

風は視みふ形かたちして

波の浮城うきしろせめぬれど

おぼろに白く見ゆるのみ

脚絆かばんとく間も汐くもる

愁うれひのかげもかゞやきて

染めなば赤く照り添ひぬ

創世はつせいはゆらく海の靈も
 鏞かねある鐘の音にも似て

静かにとほく廻ぐるにぞ
 只なつかしと波に寝て
 盲目めくらに似たる形相が
 姿も海の香にとけず

一時は波に掌てをのせて
 心のいたみきし時
 若き生命いのちは傾ける
 貝の火皿ほざに似たりとて
 時をし守る時守と
 波のさしやき聴きいてみぬ

あゝ面影とさびしらに
 海にとほくに消ねにたれ
 また迦具士にかへらむも
 夢朽ちてゆく滄海に
 母呼びかへし恵つぐなき
 古き眠をいざあはむ

鳥よ、朝を天あま驅かり
 冷つめたき墓に迷ひ入れ
 只かゞやかかの海は今
 悲しき音に鳴り渡り
 遂に舵なき龍頭や

鶴首の舟といづれぞや

さはあれ楯をふるふ如
わかき心をふるはせて
ひるかへりゆく海鳥の
かゝやく翼にかへらむを
只真くらさに落つる哉

夕の歌

日の影西に沈む時
獨り尾上に待みて

秋
元
芦
風

黄金彩織る夕映の
森掩ふ態にあこがれぬ

空をいろざる夕雲は
地に平和をもたらしつ
夕の鐘の音につれて
万象こゝに憩ひたり

われうち出でぬ！胸よ今
天地の静肅を覺れかし
子等もろともに憩ふべし
汝もゆかずや野のほどり

たそがれ、今を野の花々
 次第く／＼に眼を閉ぢつ
 夕の波は静しづかにて
 野川の流音もあし

疲れし身をば休むべく
 風神シユルヲユは憩ふ木の葉蔭
 夕の露に羽ぬれて
 蜻蛉かひる蘆にねむりけり

又は葉に寄る黄金オウゴン蟲

薔薇の葉はそが搖籃カサネにて
 牧の男の子と諸共に
 羊は臥舍ワヤに歸りゆく

草の畦を求むべく
 雲雀も野邊に舞ひよりつ
 森もり谿たに深くさまよひて
 鹿も臥床を求むかな

あゝ萬物は今の時
 我家に入りて憩へども
 故郷ふるさと遠き人の身は

夢に我家を忍ぶのみ

げに故郷の遠くして
往くに由なき身は此處に
夕、我家の思出に
胸の焦望ぞたへがたき

(フリードリッヒ、リュッケルト)

向日葵と牽牛花

内海泡沫

あけぼの東天の戸を開き
白光の車駕雲を就て

面いかめしき日の男神
今ぞ我世に現でたまふ
下界こゝなる御園生に
花の女神のたゞ二人
一人は向日葵仰ぎ見て
浅みどりなる袖かざし
一人は牽牛花俯し萎れ
紫うすくきわんとす

*

*

*

*

*

向「やよしほみゆく朝顔よ
 暫しは待ちぬこゝにして
 追憶遠き戀がたり
 胸なぐさむもよからずや」

率「實にその戀のこし方ぞ
 この身この名のもとのにて
 生命かあらじなべてなり
 星光うつしておく露の
 清き思ひにあこがれて
 同じ宿世はもてるもの
 珠玉とつゝみて何かせん

いざ君かたれ我もかたらむ」

向「我が前の世は都なる
 富める豪族の生れにて
 みごりの帳奥ふかく
 風さへ厭ふ姫なりき
 願ふて缺くるなげきなく
 人の榮華はつくしたれ
 ふとこそ得てし片戀に
 悲思ぞつゝめ人知れず

姿雄々しき日の神を
 男子の王と敬慕へごも
 金力も甲斐無、小薄の
 よそにのみこそなびきけれ

哀情をこめし願言さへ

空吹く風ときよながし

忘る間なきも一度も

君は我身を顧もしたまはず

いかにかましてせめてたゞ

うれし隣愍を乞はじやと

幾日幾夜をあらかねの
 地に手をさゝへ打仰ぎ

一粒の飯だに食まず

一滴の水だに飲まず

熱涙と冷露を糧として

瘦れゆく身をもいとはず

東雲そむるあしたより

夕榮さむる日暮まで

たゞ片時も目はなさず

こひしきみかげ視しほどに

一念こりてかくざまに
 足地に根ざし顔ばせば
 黄金の花の草と化し
 名も向日葵と今も尙

女ごゝろの執着は
 めぐる日影に打つれて
 首さしのべ高幹の上に
 かくてこそ常久に日に向ふなれ
 さてしも戀し日のみ神

今出でますをしらすかに
 おなじ思ひをひめながら
 などしほみゆく牽牛花よ

牽牛我が前の生は草ふかき
 葎が宿に人となり
 廣き牧場に田の畔に
 牛牽きなれし村娘あり

夏、天地に戀もねて
 我もあさけを知り初めつ
 霧かをる野の朝ごとを

日神を戀人の待ちわびて

御すがた仰ぎおろがみて
 笑みてみくるま迎へしか
 高きたふとき君ながら
 戀にけぢめのあらずてか

生れいやしき賤の女の
 切思は通ひゆるされて
 愛熱焔とあり光となり
 ひたすら我にそゝがれぬ

さあれ世なれぬかよわさは
 少女ごゝろのあゝなごて
 かゝやきまばゆき日の神の
 つよき光に得たへんや

見るだにそゝろはづかしく
 袂に面をひそめつゝ
 覗き思ひに身はきわて
 かくは花とぞ咲き出でぬ

雲錦の帳引かゝげ
 天床はなれ笑顔をば

あらはしませば我はしも
嬌羞秘めてしばむなり

あしたを苦み暫にほふ
花はみじかき榮ながら
愛よ不朽常少女にて
『自然』の戀とかをうまし。

四 聯 狂

紫 野

徴

白

朋

佐保姫が笛花風は
若葉を匍ふて覺醒の

賦をさゝやくや現にて
まだ睡むげたる紫野

薄き幕をのぞき見て
空に息吹けば陽炎は
先づ日輪に朝終へし
糸柳を呼ぶ紫野――

緑の裳裾紫の
冠いだきて戀に泣く
化粧やさしき堇草
涙に霞む紫野

蝶の舞の座金冠や
白金刻む五彩色

花風の譜に閑あけて
平和を歌ふむらさきの

疾

風

疾風は雲に送られて
花降る中に隠れしが
色よき人の裾縫ひて
驚く人の眼に入らず

疾風は雨に送られて
窈窕の笠奪ひ去り

青葉深山に宿りしも
樵夫も知らずなりにけり

疾風は霜に送られて
空に錦をゑがきつゝ
龍田の宮に詣でしが
歸るを見たし人はなし

疾風は雲に送られて
都の町に來りしも
即ち姿かき消わて
朝ゆく人は足駄あり

猷
燈

緋緘の雲の鎧に
落武者の死ところ暮れて
行く春を櫻こぼるゝ
尾の上には梵鐘うつ寺

莖
月
一
露

西方の諸仙銅鑼して
惡靈に香華せん時
山蔭に大蛇かひそむ
吐く息の靄ぞむらく

黄泉よりかさど風くれば
空鳥の杉をごろしう
里の戸は又と開かず
寂莫を何んの領する

横雨に尾花野みだれ
魂暗く地に迷ふ如

現じたるほそき献燈あかし
 はこ杉は神寂かみましぬ

熊笹のさゝ鳴るところ

苔の上ゆ露に星ちる

明神の八幡さつた

霧かめば神を覺ゆる

神靈か、献燈か、あゝ

總身は眞清水あびぬ

沈黙しじまより御怒の聲す

我が魂の空に消えなん

献燈あかしの影に屈すれば

祠やしろの戸闈ひらに開きぬ

まぼろしの我にやはある

俗身の化石せん夜か

駕かをめさせ崇徳たかむねの帝みかど

武夫に弓矢をはかせ

西にゆき東に見わて

仇うての呪のろひか變化か

信頼があげつらへばぞ

敗にたる保元の亂や
 さすらひの離れ小島の
 御社の爲朝の夢

その夢の寂びをおび
 その聲の怨を叫ぶ
 これやその大闇のあと

鶉鳥は沈黙をとふも
 献燈に身じろぎもせで
 額をふせちひさうそひぬ
 里遠み星落つしきり

水ごゝろ

筒井堇坡

五月雨はれし池の面
 むらさきの鬢そよがせて
 緑衣すゝしうゑませるは
 かの燕の子の妹從にて
 起居振舞しとやかに
 縹緖すぐれて美しく
 芳紀のそれよ一八か
 二八十六あやめ姫

こなたは無位の殿蛙かきず
 小かへるあまた引具して
 漫まろろ歩きのあかときを
 なまめく姫がまなざしに
 戀といふものおぼわしか
 胸の大波高搏たせ
 双手をついて恍惚と
 せちに眼まなこをしばたゝく

岩 つゝじ

名に負ふ山の丹波路は

五月道きつきみちに雨多く

おもしろきまで水まして

保津川落つる舟疾はやし

岩より岩に迷まよひしる

奔端霧と飛沫しぶききては

七彩虹の高榮さかねて

さと新らしき興招まねぶや

舟士かこが操あそぶる水棹みづさしに

危あやうかりける淵ふちぬけて

眺望たうぼうよ艶あやに山姫やまひめが

裳裾ともゆる岩つゝじ

清

怨

井上桐雲

小百合の花の一瓣よ
實に永久に偉なる
浮世榮枯のはかな雲
幾世嵐のつらくとも

容貌をさあき人の子が
緑の鬢のほつれては
玉手小櫛のたゆたひに

星のまぶたも重かるを

つたなき運命のわびしさに

遺瀬涙につゝみすて

とき色褪せしさび頬に

寂しき微笑を堪へては

泣いて笑ふて、笑ふて泣いて

熱き涙の露の球

有情の花に濺ぐなら

句ひの色彩は紅の

胸裏に血汐の跡りては
迷いの海の深かるに
身は浮舟のをぼつかな
行衛何處の岸にこそ

色彩を嬌りの虹の輪の
廳て消ゆくまばろしを
我世の映像になぞらへつ
心の底に秘めてしが

名なき小草の一莖も
情の妹は甘かるを

浮世の君が嘆くなら
星のをもわる萎むじやに

紅き紫——朝顔の
露の生命は定まるを
咲いては變る紫陽花の
詐り多き人心

深紅に彩る楓葉が
眞個、心の色ならば
聖きもだねにやつれたる
纖弱き捐を染めてまし

朝夕あしたゆうゆを若人が
 心も空にさまよふて
 野邊の噎さげき何を得し
 森の秘め事なにをかれ

吉備姿

三木露風

都に遠き吉備あれば
 歌の方かたには榮はねすして
 鄙ひの小女が袖をふる
 をかしき歌の吉備姿きびぶや

幼わかなければと愛娘いとむすめ
 踊る巧みを優しみて
 母ははが育そだてし同胞どうぼうの
 背せ顔がほ艶えいなる頬紅ほおべにや

戀知らぬ子の戀を舞ふ
 聲よき唄のうた一つ聞きけ
 『短みづかかき夏の夢ゆめじゃもの……
 醉よめふて狂くるうて泣なかしやんせ』

髪は亂れて長袖の

襦袢は人に見るとも
見られし人に淺絹裏の

山脈遠き吉備の里

風雅まなぶと京人が

里を過ぎなば吉備姿の

優しき唄も聞いて行く

み空は闇に暗からば

唄に情けを知りし子の

胸の情火に映わしめて

美し人に忍びも行かむ

櫻 月 夜

さくら月夜に笠脱けば

花はら／＼と袖に散る

被羅かむりて笛吹いて

風流を真似る子ならねど

けふを明日への旅衣

只あこがれて辿りけり

追憶多き故郷の

過ぎたる夢を追はむとて

此子に詩はあらずとも

あゝ新らしき戀湧かば
 青春心の得堪へんや
 はては覆ひて泣かるゝに

靈火にそむく情熱の
 よしや妬みは多くとも
 美しくし戀を咎めざれ
 面映ゆかりし春の夜の
 別れにまみを溢ふれたる
 涙そゞぎて君思ふ

せめて二人に酔ふ子等に

花よ吹雪を惜まざれ
 相思若うて君を捲く
 腕よあまり弱くとも
 (有情か花のひとひら
 うつくし戀を載せて行け)

ひとりゆくにもあこがれて
 狂ふ心臓に同じ道
 花を仰ぐる旅の笠
 斜に月を透すれば
 雲漂ひて影しづか
 櫻月夜は更けて行くかな

晩

鐘

川路柳虹

おびそかに

また悲しくも

今ぞ鳴る

入り合ひの鐘

ひゞきゆれ

亂れたゞやふ

野の小草

野の名なし水

紅朱の空

うつろいゆきて

夕づゝの

残光も消ゆぬ

治動の

朝の氣こゝに

たそがれの

寂黙にかへる

風暗く

灯はきわて

ものみな

音とてはなく

ゆきくるゝ

寥のうち

野路かへる

人影もなし

聲きかぬ

静けき夜半か

鐘の音に

四方に流れし

よき夢の

香につゞまれて

眠りにし

野よ花草よ

二

けふの日の
皆闇の
萬象よ
烏羽玉の
ほまれも罪も
黒きがうちに
今ぞいたりし
眞闇のうちに

をちこちを
裾ひくう
今ぞ來る
灰に似し
迫る夜霧や
野草をまきて
死のさびしみか
黒き野の影

かすかなる
鐘の聲
餘韻ながれて
こゝに止みぬる

風さむみ
人香なし
爐の石冷ねて
大きなうち

おそひくる
暗きかげ
よき夢の
眠りにし
闇また闇の
よもに落ちたり
香につゝまれて
野よ、花草よ

(ロングフェロー)

草いちご

夏の日青き深草に

門田臥風

うもるゝ玉もありやとて
かうべを垂るゝくちなはの
おそろしとはあらねども

神が使つかの蛇ぞとは

あなそらごとよ誰がいひし
毒ある舌に巻まかるなど
刺はわれにぞ賜たまひにしを

そは毒をのみ刺すところ
人に知られてかしこけれ
されども弱き野虫らの

したふてくるをやなしふと

日ねもす地つちにまろび寢ねの

光りも浴ゆびす草深み

かくるゝことのかばかり

つらきわが身の運命さだめぞや

蛇こそとげに追へれども

ゆかしき花の白百合を

戀ふる小虫もいくたびか

われを避くるを如何にせん

あゝ草いちごわれひとり
 さびしき様よ茫々ど
 もゆるみどりの夏の野に
 紅くみのるも何の榮

果なき野面の濃みどりは
 眞青の空につらなれり
 われは草根にきよらなる
 心の友をもとめなん

蘇うばらほこりかに
 空をあふいで咲きもすれ

夏野に聖き白百合も
 思ひしなゆるかよわ草かな

野 調

畑 荷 香

花は彌生の春深み
 妻手づくりの美酒に
 酔ひの小唄をすさみつゝ
 いと日鳥なく里をゆく

春日うらく風もなく
 紫染むる遠かすみ

陽炎燃ゆる若草や
畑打つ人の長閑なり

麥は芽生へて菜の花の
畦道辿る繪日傘に
行くは何處と尋ぬれば
彼岸詣での戻りとや

小波光る小流れに
花は音なく漂ひつ
紅くれなのせて南みななへ
霞の野邊をめぐりゆく

土橋の裾に柳茶屋
匂ひゆかしき淺みどり
草餅強ゆる小娘の
いつもながらに美しきかな

初

午

今日は初午在所の祭
赤い鳥居のお稻荷様は
幟ひら／＼太鼓が鳴つて
笛にあはせた馬鹿囃子

祭見るとて小娘ごもは
赤い鹿の小口紅さいて
宵に仕立てた着初の小袖
吹くや春風紅梅模様

竹の小笹に提灯付けて
娘からく腕白小供
親にねだつて貰うた小銭
走る拍子に音がする

歌巻を秘めんこして

吉

備

男

花の香匂ふ丸窓に
黒髪梳る姿のみ
披ける詩集に描かれて
蘭燈暗き想ひかな

鏡の前に裙曳きて
帯ひきしむる立姿
羽織の背に染ぬきし
桔梗の花の慕はれる

人の眼を眩る寶石入りの
指輪はなくも唇に

さゝ朱落す手の細く
 五本の指の純白なる
 膝に重ねし振袖は
 色 紫の藤模様
 胡蝶とや見し束髪の
 白きは少なき簪にて
 おぼろの市にすれつがひ
 そと振り返り視入りぬる
 肩掛頸の後つき
 我身は戀の空蟬か

我身は戀の空蟬か
 魂は何處へ、白雲の
 雲のあなたの花園に
 戀の泉を尋ぬらむ
 已歳生れの男子にて
 物怖れする我なれば
 願ひの兄を許せしに
 妹と呼ぶにたゆたひし
 風あたゝみて水温む
 巖戸開ける春なれば

戀知りそめし我胸は
おもひ亂だるゝ絲の如

血汐沸き立す沸返る
胸の災を消滅すべき
濁きし唇を霑すべく
欲しや、一滴戀の泉

肩にかゝりし黒髪や
すゞしき、瞳、笑ましげに
彩ある雲に半身を
よせたる姿氣高きに――

いく夜寢醒の闇の裡
氣高き姿慕はれて
なりし、君戀なる歌卷は
永久に我手に秘めおかん

霜に開きし

水仙花

吹雪に咲ける

白梅の

精や凝りて

生れ來し

神にも似たる
君なれば

丘上微吟

野村堇雨

つく／＼ぼうし咽び鳴く
丘 芙樹の幹高うして
狭霧下りたつ朝ごとに
高く澄ゆく秋の空
雙翼に朝の日光うけ
空、飛わたる山禽の
たか鳴く聲も爽やかに

かはす翼の白きかな

櫟併立つ岡越して
真裸に立つ膽吹山
いゆきはばかる白雲の
なびく姿も猛くして
今、中稻刈る麓田の
八十の里わの眼も遠く
高澄む空の一つらに
なづさふ靄の碧なる

今日鳩吹くと山に出で

倦んじてかへる麓への
 白樗木の下に佇みて
 振返け見れば晝の如く
 野邊も林も初秋の
 寥しき光景と遷りつゝ
 干沼の畔につゝり咲く
 名もわびしさよ蔓珠州華
 鶉来て鳴く丘の上
 淺茅枯れしも哀れなり
 築の崩れにや鮎とび
 櫛黄葉する楫悲の川

流るゝ水に白帆ゆく
 秋の姿は見ねども
 柿の實探ると岡がくり
 森にわけ入る里の子が
 佇む麓の逢遭に
 戦慄き叫ぶ諸聲の
 北の林にごよめきて
 檜の古葉をこほすらん
 隴ならびよき田の面や
 平野は霧の海に似つ
 麓にこやす遠近の

郷き林は島に似て
 日高くなれば田の畔の
 枯草の上に飛ぶ虫の
 翼も軽き秋日和
 水さゝ濁る満川の
 穂蓼の上を徂徠す
 蜻蛉あきに秋の空碧し

あゝ今秋の丘に立ち
 八十の遠里はるくそ
 秋霧たつ野を眺むけば
 椎の葉上に飯めいもる

旅の人にはあらねども
 大野に満つる寂寥さびしの
 わが身に迫る心地して
 木綿にかも似る白雲の
 たゞやうあたり高やかに
 鳴きわたりゆく山禽の
 聲も杳けく遠方の
 里なる方の慕はしき哉

大 火

崩るゝ潮と押し寄する

渡 邊 春 浦

魔神息吹て大いある
 羽を虚空に振ひては
 草木戦きなびくかな

これ助くるに風の勢
 氣負ひ狂ひて平和の
 民を陥すとあげ笑ひ
 闇を光明にかけ來れば

ア、見よ其處に一抔の
 煙は揚る町屋形
 童煥叶きて騒しう

打ち出す鐘や、火車や

柱は折れて石裂けて
 人は黒煙きに包まるゝ
 焰、紅蓮の毒舌や
 四邊血汐に染みし如

呪咀たけなは天風の
 呼吸ははづみて襲行く
 行手鳥有に歸し果てん
 修羅の巷を恰がらに

國のみ爲めと盡せばぞ
 人に榮譽の道はあれ
 二千の生靈空しくも
 怨をのみて横はる

今は飽きけん魔神共
 悠々隠る暗の領
 出でゝ見渡す廣茫の
 人は平和に復れども

胸の傷みは堪へなくに
 灰燼の野に佇みて

思はず曇れ、星眸の
 溢るゝ露よ、頬に冷たき

木 枯

北 澤 芳 雨

さながら冥府の戸もれ出で
 沈黙のわが胸みだしくる
 しこめがかなづる琴の音の
 『さびしみ』そに似し木枯や

なれこそはかなき闇の夜の
 猛なる自然のさばきなれ

ひとたび『滅』と羽搏せば
野山もいたく萎へしすがた

あゝまた『はめつ』とふるひつゝ
氷雨もまじりて吹き來れば
莊嚴大厦もかつふるひ
山をもくだかんきほひなる

悲哀、恐怖と群れて來は
胸内の血汐ぞあゝかはき
我はや石より冷ねくゝて
無量の生も老いゆくよ

君が家

萩原美棹

あゝ變人の家なれば
いたびそこを行きふり
空しくかへるたそがれの
雲つれなきを恨みんや
水は流れて南する
ゆかしき庭にそゝげごも
たが放ちたる花中の
艶なる戀もしらでやは

垣み見ゆるほづきの
赤きを人の唇に
情なくふくむ日もあらば
悲しき子等はいかにせん

例へば森に鳥なき

朝ざむ告ぐる冬の日も

さびしき興に言よせて

行く子ありとは知るや知らずや

あゝ空しくも往來づり

狂者に似たるふりは知るも
からたちの垣深うして
君がうれしいのごゝきあへず

斑鳩寺

有松 曉衣

寺は大和法隆寺、今九條家の息女下つて門跡に在す、
われ二六の春繼がれてそが金堂に入る

御寺ふるきよ二千年
ひろき國津の長なれば
行人枝をとめては

仰ぐに雲もぬかづむ
 高かき五輪に鳩むれて
 影狭き晝の外もしづか

門跡二十路わかければ
 被布むらさきの蘭紋や
 むすぶ糸目に彩たちて
 奇しき光りの袖に添ひ
 もれては翳す尼が小手の
 珠數水晶よふれて鳴る

鳴るは扉の鍵の黄金造り

啓くも氣眩し金堂の
 朱、金、紺青をとなしう
 るみて立する彌陀二像
 圓光榮ゆるそが中に
 なを一像の立ちたまふ

姿目眩しう畏る身の
 胸にとごろく廟の鉦
 金鈴ゆうぐ氣配して
 ホ、と聲する闇の索
 御手にすがりて廻りゆく
 古木のかほりさて酔はる

しごろの足のいくたびか
 折りひざまづく布^{しきがはら}瓦
 鑄^あ彫^{ぼり}の夜^よ及^{およ}や魔^まの象^{すかた}
 怯^{おそ}ち伏^ふす眼^{まなこ}それがてに
 御^{おん}壇^{だん}の女^{にょ}蓄^{たくわ}が額^{ひま}の玉^{たま}
 光^{ひかり}り賜^{たま}へとねがふなる
 御^{おん}室^{むろ}の外^{とち}よ出^でで見^みれば
 あら恥^はらしやわれとして
 たふとき宮^{みや}の御^{おん}懷^{なご}に
 戦^{いくさ}く胸^{むね}をやすむごと

春^{はる}あたゝかき斑^{いば}鳩^{とび}の
 丹^に塗^{ぬり}の冠^{かぶ}木^き陽^ひにもゆる

う
れ
ひ

栗
岩
花
山

わか草^{くさ}の今^{いま}もねそめて
 うらわかき春^{はる}は來^きぬらし
 朝^{あさ}がすみうすむらさきの
 岡^{おか}の立^たつうれいの汝^{いまし}
 かのうれひそはうるしはき
 春^{はる}にみなさゝげしならん

身は若き草にたふれて
夢は今處をたどる

花わけて女神はそこに
裾長う風姿うるはしう
我笑めば女神もほゝ笑み
我言へば女神ももの言ふ

よりそうてうるはしきその
もすそにとかた手ふるれば
さと起風冷たくて
女神消ね夢はさめたり

うらわかき春やいづこ
若草は枯れて色なく
たゞ寒き秋風渡る
岡の上の汝はあはれ

うれひまた身をおそひ來て
岡の上に春をうらやむ
あはれいましも世のうつろひに
ますばかり汝がうれひ

磯
少
女

管屋いぶせき住居にも
 みをやいまして温あたたかき
 なさけとこ春みにしめて
 夢みるごとき磯少女

底きひの宮か和田津神か
 み旨つたふるさし潮に
 ほゝるみませよながおもひ
 人の世にこそめでたけれ

水精すいせいこりて宮を作す

龍女が奇くしき渡殿わたのどのに
 齋いき女の子が清歌きよかに
 召させ給ふと人やいふ

藻刈『お磯』が玉ゆるゝ
 歌のやさしき音牙ねがわて
 ひとゝき和なごむ海面うみづらを
 こぐ櫓も澄すみて父かへる

柔なご頬ほにかゝる鬢かみの毛を
 浦曲うらまの風に吹かせつゝ
 魚籠いさなごを父とし梗えいへて

少女の唄　カあり

老ひな少女よ安房の海の

鏡が浦に朝夕べ

富士のみ山を仰ふぎつゝ

聖光は胸にあり

永久に光明がきざしたる

少女が眸よ星ありて

兩掌に掬ぶましみづに

若き姿は映るかな

――拾ふてよいか

忘れ貝

砂に埋めな

人の戀

沈

吟

輪廻は早くす走りて

流るゝ時も夢のごと

過ぎて三年はめぐりけり

しめれる土の香に蒸して

苔生ふ墓のもの古りや

石にきざめる父の名も

消ねて見るさへ悲しけれ
 冷やける死の御神に
 召されて逝しわが父の
 人靈凝りて天の上に
 現んせしものよ、一つ星
 残りて吾兒を戀ふるとか
 あかがれ心地夢のごと
 墓畔に天を仰ぐかな
 逝にし文を吊ひて
 憂はめぐるわが胸の
 裂けんばかりにとざろいて

苦しきまゝのすべものう
 墓標にすぎる悲しみの
 血汐はこりて涙ふる
 折柄しきる寒風の
 袖に哀歌を吹いてゆく

雜

祭

中
 村
 星
 湖

この間をよしや龍王の
 珊瑚の宮に壁へすも
 たゞみは青き二十疊
 銀燭白日を給いて

榮光ぞ満ちたる溢れたる

緋桃白桃挿し添へて

たもこをひけば雛壇の

丹塗を滑る紫や

被布のあるじに姫の名を

ゆるさまほしき春の宵

もとよりこゝは富士の北

ましらきて鳴く峽なれば

京に住むてふなにがしの

一の君はた二の君の

訪ひ給ふべき町ならず

湖に女の神は祀れども

権りに現じて末の世に

なご奇蹟を垂るべくや

たゞ自ら美しき

姿を振ぞ容顔ぞ

『菱に切りたる草餅の

紅と白との色々を

誰か手に重ね給ひし』と

問ひそ優しき願きことの

崩れもせんとあやぶむに

強ひてし問はゞうつむきて

『鄙の名もなき草の餅

積みばとてはたすてばとてし』

頬を染めつゝ云ひあやみ

さだめの末は説かざらむ

金屏ちさき第一の

壇に居ならぶ内裏雛

雌雄の玉頬のかゞやきて

愛の息吹も通へばか

あら瓔珞のゆらぐぞや

二足三足後すべり

四足五足退きなづみ

我を忘るゝ少女子が

灯と灯の間に幼影を

見しかあらぬか夢の面持

田園にかくれ居て

う

た

か

に

偏狭の性いかでかも
圓滑の世にも合ふべしや

奇矯の才よいつか又
 浮華の詩壇に容れられん
 あゝ我さらば筆すてゝ
 劍とらむか鋏とらんか

うき世の榮にはぐれきて
 葛まつる破窓に
 禿びたる筆をねぶりては
 苦吟幾夜のなやみより
 うまれかよわき二十歳兒の
 蒲柳のなげき身は瘦せて

小胸にいだく憤怒も
 慰藉は野邊の花と鳥
 幸福と快樂と健康と
 額の汗にぞやどるなれ

牛にまたがる牧の子の
 笛にや合せむ我がしらべ
 さあれ藝術の渴仰と
 愛執筆は捨てかねて

かの人ほふりはてぬべき
 (我その悪事に適はんや)

衛士のつとめのがれきて
 今ぞいそしまむ労働や
 泥にまみるゝ鉄よなほ
 冪る劔にまさらずや

人は千里の異郷に

修羅の戦場にせめぐ間を

我や天地に同化して

しばし忘れん世上のなべて

殺戮事とし世をあげて

皆たゝかひによへる時

ひとりさめては平和たゝね
 造化自然にあてがれん

熱風吹きまくミズロンギ
 蹄砂にうらみのこすより
 ライグル静閑に野の花に
 ふかきこゝろをたづねばや

光明山下春ふかく
 風と月とにあそびては
 故郷の人情のあつきめでゝ
 我暫らくは市に出でし

田夫の生活、野のけしき
 詩題ゆたかに雅趣あふる
 詩神の住家か田園に
 かくれて無才我はうたはむ。

琴坂、三味坂

ほふすゐ

揖保川、舟にまろ寝して
 網干へ下る小娘が
 琴坂山の麓にて

東に立てる三味坂に
 母が臨終の里唄の
 松吹く月にこもるやご
 黒瞳、露にうるみたり

夏八月の夜もすがら
 行者三人が行きくれて
 山のこだまど語るとき
 いきし千人の姫の髪

あゝ春の日の真晝すぎ

城の美童の花車
 引きにし時よ振袖に
 琴の一絃切れしとか

さらば琴坂今はとて
 おはぐる黒き花嫁の
 手向の花に石佛
 露にぬれてぞおはすなる

今琴坂にさまよひて
 上にもうもれし撥とりて
 なよびて立てる琴坂よ

戀のうたげに招じ見ん

あゝ其の音か天ぞらを
 東にかへる鶯が
 城のおん座の玉姫の
 やさしき胸に忍び入り

嫁き玉ふ夜のさむしろに
 さらりと亂る帯の香に
 丸鬘姿したひつゝ
 其行く末や追んずる

身は三味唄を歌ひつゝ
 琴坂越ねて貰ひ乳
 松風三味につれびげご
 わが子なぐこむ術知らず

草染衣、花衣、

身によそほひてひた馳せこ

釣鐘ひける女房等に

抱かれてのみしうまし乳

さても奏かなでのいみじきや

清姫ならぬわれなれど

佐保姫からぬわれなれど
 草を枕に夜もすがら寝む

註琴坂三味坂は播磨にあり、揖保川其の麓を流る。傳へて云ふ。
 琴坂に舞姫あらはれて琴を奏で、三味坂に歌姫あらはれて歌の
 音清う、夜もすがら里人の静けき夢を守ると。

羅馬なる吾が繪師の友に
 贈りし文に記したる歌

内 田 萩 江

花のにはひの空にみち
 甘き天露のしたよりて
 葡萄、橄欖、みのるてふ
 君、伊太利に幾年ぞ

曉、山の頂きの
 紫うつき横雲に
 ラフェローにをやしのびけん
 羅馬は古き都にて

森の香ゆかしき苔の上に
 マイケル、アンヂエローをやしたいけん
 夕べ光の西にして
 葉をこす影のうすかれど
 しろのいしづね崩れたる
 蔓草まどふいにしへに

夢の歴史を月の夜半
 露にぬれてもたちつくす

詩歌の國の花ぞのに
 天つみ國にもかるゝやと
 香に酔ひて色にめなれて
 春あたゝかの空のいろ

名にこそたてれ音楽の
 此國人のたすさみに
 さながらこゝろとけはてゝ
 たまは迷はんくもの上

繪筆とる身なほさら
 草花かをる野に立ちて
 白、紫に黄に赤に
 たらぬるのぐをかこつとき
 入る日を負ひて歸りゆく
 白き羊の郡とほく
 鞭とる兒らの牧笛に
 想おもひはてなき丘べにも

森のかなたにそびわたる

み堂の庭に影さして
 ベルの響もうつゝにて
 ふですてがての君なれば

道にはあつき若人の
 血汐は腕にみなぎりて
 畫聖の招くみ手の方
 たゆたいなくて進むにも

『橄欖の

にはふ葉蔭にゑふでとり
 むかしは夢ようたかたの

消わもはてぬ』と

ペンの走りもうるはしふ
吾れもほゝるみたゝへしが
『さすがに夢はふる里の
破れしまがきに立つ』と云ひし

八重の潮路のはるかにて
ことつくになることのはも
姿も似ざる人中に
かゝらぬものゝなにとてや

歸へれ吾が友ひとたびは
八ひらの芙蓉雲に入り
大八島根にそゝり立つ
君がふるさとはるにして
産湯^{うぶゆ}汲みにし君が家の
裏のお庭は荒れたれど
八重の櫻はしかすがに
むかしながらの花にして
かたむく軒に誰れをかも
忍ぶの草もめぐみつゝ

老ひしみをやの只ひとり
かすかにひやく糸車

君が命と云ひたりし
亡き戀人のおくつきに
こけはむしたり露おきて
涙ともみる戀人の

いしぶみ近ふよりそへば
うらみ言葉もなからじや
花櫛若き少女子の
ありし姿の君なれば

おごそかなるやたくみらが
其名とともに残したる
仰ふぐ伽籃の大扉に
血しほにまがふくれないの

太き繪筆に染めなして
『故郷をこふる吾が胸の
さけん思にたへざれば
うしほを蹴りて去るなる』と

みくのにの文字の鮮やかに

記してかへれ繪師の君
おさな馴のわらび野は
かげろふ立ちてあたゝかし。

秋 興

河 田 白 露

一條雲はほの白う
み空の果はに漂ひて
風に小草のふしてより
あふげば早やく秋は來ぬ
* * * * *
うす紫の振ふの袖

ひざにかさねし少女ぶり
髪は稚兒鬘かほそおもて
うすく化粧ひし子は野菊
細身の太刀は白銀しろがねの
み腰に軽く佩きたまふ
前髪立の御姿
桔梗あじふの君に駒ひらむ
昔都に名は高く
國へ土産のその内に
數へられにし立女たてむすめ形

なごりはこゝに女郎花[△]

我に不足はなき敵と

黒き瞳に見定めて

首級あげたる猛者姿

血をあびて立つ葉鶏頭[△]

身に黒染の麻衣

あした夕の看經^{かんけい}に

べにの匂ひは失せつれど

尼は若けれ吾亦紅

世のことわりをたゞみたる

胸に垂れたる白き髻

うすき夕日を背にうけて

野べに立たせる尾花翁[△]

爪ぐる念珠^{じゆず}のいくかへり

切髪姿品かたき

つくりも白き萩の刀自

浮世の浪にゆられつゝ

笑ひてくらす下町の

前垂がけの世話女房

あから顔なる蓼^{れう}の花[△]

草色なせる襟たてゝ
 帽子深目に戴ける
 これや詩人の葉がくれに
 露草[△]何を感じずらん

* * * * *

一條くものほの白う
 御空のはてに漂ひて
 風に小草のふしてより
 仰げは早も秋はたけなわ

こゝろ草

平井 晩

君が魂に

白露と碎けて花の香にしまば
 雄しべ雌しべの戀も聞くべし

戀に破れし捨扇

花のけがれにそゝぐ可き

弱き力の風にだも

堪るぬ悲しきわれなれや

涙に在りし小枕に

寢醒を詫ぶる後れ毛の
 長き短きくらべては
 堪ぬ悲しきわれなれや

はなれ小島は遠けれど
 浪かくれ行く水鳥の影
 雲井の星は高けれど
 なほ百合の香は通ふべし

弦のひびきの花に入る
 その天國の泉には
 君が心臓にそぐべき

情の影や宿すらむ

君におくれて瀬を早み
 春行く水にそれに似て
 心くるへる今の身を
 魂は哀れと思さずや

かくも亂るゝわが戀や
 せめてみ魂に通へよと
 夜毎の鐘を打つしきる
 音沈みゆく闇なれ、世なれ

花のゆらぎ

花にも灯影こぼれて芍薬の
白き揺ぎぬ赤きくづれぬ

それよ白きは片糸の
戀に染りて咲出でし
花の命をさゝやくと
夜風は花をとづれぬ

夢暖かに、低かに
二つの花の悪きては

崩れて、揺れて自から
互、心の音ぞたがふ

枕をめづる水の音に
人世のさだめを指をれば
口紅のこるなよ指に
こもるは老の影なれや

崩るゝ赤花をたとふれば
戀に朽ちたるそれのこと
揺れたる白花をたとふれば
戀知らなくの姫のごと

詩人よ染めなの戀衣
かたしく袖にひそみては
罪は炎と現はれて
胸をやかんの姿あり

戀の雫の泌みく／＼て
やがては瓶に溺れなん
底にひそめる罪惡を見よ、人、

新 体 詩
青 蘭 集 奥 附

明治三十九年九月十日印刷
全 年九月十五日發行

著 者 入 澤 恕 次
發 行 者 大 阪 市 南 區 北 炭 屋 町 百 七 十 番 邸 柏 原 政 次 郎
印 刷 者 大 阪 市 南 區 末 吉 橋 通 四 丁 目 十 六 番 地 井 下 幸 三 郎
發 賣 所 大 阪 市 南 區 御 池 橋 東 詰 南 へ 入 柏 原 奎 文 堂
大 阪 市 南 區 瓦 町 二 丁 目 赤 志 忠 雅 堂
全 岡 山 市 榮 町 吉 田 東 壁 堂

